

学生時代のひばりちゃん クリーム色の自動車で登校



校門をくぐれば美空ひばりではなく加藤和枝だよと、学園生活は特別扱いしなかったと語る石井先生です。果たしてひばりちゃんの学生時代はどんな生活だったのでしょうか。

教室掃除も人並みに！

もう八年前……確か二五年の三月初めのことでした。福島道人さん（その頃のひばりちゃんのマネージャー）が、『ちょっと、変わった子なんです、お宅の学校に入学させていただけませんか』と、訊ねて来ました。福島さんの奥さんが当校の卒業生で、よく通じ、推挙出来るこの学校に、是非、美空

ひばりを入学させたいと言うのです。

『どうぞ、どうぞ、私は子供を落第させるのが大嫌いでして、志願した生徒さんは、皆入学させるのが理想教育と考えているんです。御心配なく学園生活を楽しんで下さい』

私はお恥しい話ながら、美空ひばりさんがどんな人間であるか、まして、当代きつての人気スターであることなど知らず、軽い気持ちでお引き受けました。

『実は歌を唄っている子でして』と

福島さんに言われた時、「ああ、そうですね、それなら教室が明るくうんと歌を唄ってもらいましょう』

そう言った程、私は、美空ひばり」という人気芸能人について、うかつたのです。

確か、十六番教室でした。

『本当のひばりちゃんだわ、わーステキ！』

一年生達が、彼女をとりまいて入学の喜びどころではない、勉強などそっちのけで、彼女の周囲をとりまき、サインして！サインして！と、十六番教室は大変な騒ぎです。

そして、以来というものの、彼女は、やれ今日はレコードの吹き込みだ、

今日は興業だ、映画のロケだと、さっぱり、学校に姿を現わしません。

登校の日は、きまって、クリーム色の自家用車で、お母さんと一緒に、学校の門入って来ました。そしてお母さんは、授業が終わるまで、校庭の一部にある校長の住いにあがって待っていました。

さて、卒業まで、彼女はどの位登校しましたかね。きつと数えられる日数でしょう。

そこで、私は考えました。

『こうしてひばりが、学校が嫌になれば、教育者の敗北だ。学校に行けば、何となくのんびりとして、居心地のよい愉しい処だ、と思わせなくてははいけない』と。

だから、私は、全生徒に言い渡したものです。

『学園の中では、

彼女は加藤和枝だよ。同級生が同級生のサインを求めるなんて、おかしいじゃないか』

すると、生徒たちは、校門の外で待っていて、『ここからはもう、ひばりちゃんね』と、サインを頼んでいたものです。

また、私は、つとめて彼女の友達になろうとも努力しました。

『僕の芸名は、大地もぐらだよ』と、ひばりちゃんに言って、笑い合ったものです。だから、ひばりちゃんも、私を「もぐら先生」と呼んでいました。

創立七十年を誇る当学園では、戦争当時、日本を動かしていた東条英機総理大臣の娘さん姉妹も通学していた等、特殊生徒も数多くいたのですが、また、当折でも、学校の帰りの飲食店入りや映画館入りは、厳禁しているし、女性の躰である、家庭科の教育は大いに力を注いでいます。

ひばりちゃんも、他の生徒と少しも変わるこよなく、その中に入って、教室や廊下の掃除をよくしていたものです。

